

Y06a 木星・土星”超”大接近観測プロジェクト：惑星で星空視力大実験！！

内藤博之（なよろ市立天文台），綾仁一哉（Astronomers Without Borders），井上毅（明石市立天文科学館），植松淳子（北大総合博物館），大西浩次（国立長野高専），大沼一彦（千葉大），衣笠健三（国立天文台野辺山），鳴沢真也（兵庫県立大），福澄孝博（北大大学院／札幌市青少年科学館），福原直人，福原佳子（星が好きな人のための新着情報），村上恭彦（なよろ市立天文台），渡部義弥（大阪市立科学館）

日食や肉眼彗星といった珍しい天文現象は、人々の関心を喚起し天体観察へといざなう。2020年12月に起こる木星と土星の”超”大接近（本稿では離角が10分以下となる接近を”超”大接近と呼ぶ）もまた、極めて稀な天文現象であり、多くの人々が観察すると期待される。最接近時には約6分角まで接近するが、これほど近づくのは1623年以来、397年ぶりのことである。我々は、世界中の多くの方々にこの珍しい現象を一層楽しんでもらうために「木星・土星”超”大接近観測プロジェクト：惑星で星空視力大実験！！」を立ち上げた。木星と土星がどのように見えたか、その観測結果をオンラインで簡単に報告できる投稿フォームを公開し、観測証明書を発行するなど、継続観測を促す工夫を施した。また複数の言語にも対応させた。他方、今回の木星と土星の”超”大接近はほぼ世界中で観測可能であるため、日々離角が変化する木星・土星の見え方を多くの人々が観測・報告することで、「星空視力」についての情報を大量に集めることができる。星空視力の理解は、観望会など多くの市民を対象とした天文普及活動において有益な情報となる一方、「なぜ、昼間に星（一等星）は見えないのか」といった、一見当たり前のようなようではあるが、説明が簡単ではない「星空観察のふしぎ」の解明に糸口を与えると期待される。本講演では、プロジェクトの取り組みを紹介し、進捗状況を報告する。